



# 逆風をはね返す競争力の源泉

富士フィルムグループは、2010年3月期の業績を、売上高は2兆3,000億円、構造改革費用後営業利益は900億円の損失（構造改革費用1,450億円）と予想しています。この厳しい状況に対して、「構造改革をはじめとする経営体質強化」と「成長戦略の再構築」による企業変革をやり抜き、未曾有の危機をはね返していく決意です。それを可能にする競争力の源泉が、当社グループが蓄積してきた独自技術、ファインケミカルやエレクトロニクスをはじめとした多様な技術、グローバルネットワーク、財務力などです。

その1つである独自技術の開発は、フィルムの国産化に果敢に立ち向かった創業期に始まりました。富士フィルムは、外国から材料を購入して国内で加工、製品化するのではなく、フィルムベースの製造から感光剤の製造、塗布、加工までの写真フィルム一貫生産を目指し、約10年に及び苦闘の末に独自の感光材料製造技術を確立させました。1979年半ばからわずか1年で主原料の銀価格が10倍に高騰したシルバーショックでは、省銀化を中心に研究開発力を強化し、独自技術の確立を進めました。

技術的なチャレンジにより拡大した事業領域には、現在、メディカルシステム事業の中核となっている医療機器分野があります。この分野への進出は、1981年にコンピューター処理による新しいX線画像診断システム「FCR (Fuji Computed Radiography)」の開発に世界で初めて成功したことにより始まりました。市場のデジタル化の進展に対し、富士フィルムは他社に先駆けてデジタル技術を開発してきたのです。そして、2000年以降のデジタル革命の進展により、今まで当社の収益の柱であったフィルム需要の急落の危機に直面しましたが、基盤技術及びコア技術を融合した商品設計技術によって、5つの重点事業分野の研究開発を進め、これらの事業の成長を支えてきました。このように富士フィルムは、強みである技術を究めることで事業構造を大きく転換し、新たな成長軌道を描いてきたのです。

富士フィルムグループには、写真感光材料やゼログラフィーなどの分野で培った基盤技術と、それを支えるコア技術があり、これらの技術を深化させたファインケミカル、エレクトロニクス、メカトロニクス、オプティクス、ソフトウェアなどの多様な技術があります。これらの多様な技術が成長事業を伸ばし、新規事業を生み出す原動力となっています。

富士フィルムグループの基盤技術と重点事業分野

